

『神のことばは永遠』(要旨)  
イザヤ 40:7-8 説教者 原田惟座耶

## 1. 野の草花のように

\*イスラエルの野生植物

野に咲く草や花、それは小さな存在であっても、見つめる者の心に感動を与える力を持っています。

主イエスは、栄華を極めたソロモン王ですら「(野の)花の一つほどにも装っていませんでした」(マタイ6:29)と言われました。最高峰の技術を結集して手がけた建造物や調度品ですら「明日は炉に投げ込まれる野の草」(30)の「装い」には敵わないというのです。

そうした美しい野の草花であります、その美しさはいつまでも続かないこともよく知られていました。

過酷な条件下で咲く野の草花は、「風がそこを過ぎるとそれはもはやない。その場所さえもそれを知らない」(詩篇103:15-16)とされてきました。

\*パレスチナ地方の砂漠から吹く熱風

預言者はそうした野の草花のはかない現実と「人」(直訳では「肉」)を重ねて言います。「人はみな草のよう。その栄えはみな野の花のようだ」(イザヤ40:6)

花が過酷な条件下で一瞬にしてしぼみ、枯れてしまうように、人もまた脆く限界のある存在なのです。さらに、そうした草や花の脆さは、人間の寿命に限って語られているではありません。神様への信仰の不安定さをも示しているのです。

「まことに民は草だ」(8)の「民」とは、一義的に神様を信じるイスラエルの民のことを示しています。しかし彼らは、試練に遭遇した時にあわてふためいてしまいました。預言者が神である「主に信頼する」ようにと伝えても、アッシリア帝国が攻め込んできそうな時には、別の強い国すなわちエジプトに期待しました。神に選ばれた民でさえも不安定な状態に陥る。預言者は、そうした「人」の現実を私たちに伝えているのです。

## 2. 神のことばは永遠

私たちは、永遠なる神様の前では東の間の存在に過ぎません(参照:詩篇90:3-6)。さらに、試練を前にして不安定な状態に陥りやすいのです。

預言者は、こうした人(肉)のはかなさと対比するようにして神様が永遠なるお方であることを伝えます。人の言葉は移ろいやすく不確かなものであっても、「神のことばは永遠に立つ」(8)

のだと…。

北王国イスラエルを滅亡させたアッシリア帝国。南ユダを陥落させ捕囚の民とした強国バビロン。こうした帝国の盤石な支配ですら、野の草花のように過ぎ去りました。しかし、以下の「慰めのメッセージ」は、バビロン捕囚を経験した民のみならず、今日の私たちの「慰めのメッセージ」でもあるのです。

「慰めよ、慰めよ、わたしの民を——あなたがたの神は仰せられる——エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを主の手から受けている、と。」(1-2)

## 3. 神が「人」を心に留めてくださった

神様は、なぜ野の草花のようにはかない存在である「人」に「神のことば」を語るのでしょうか。それは神様が私たち一人一人に関心を持ち心に留めて下さったからです。

「あなたの指のわざである あなたの天 あなたが整えられた月や星を見るに 人とは何ものなのでしょう。あなたが心に留められるとは。人の子とはいったい何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。」(詩篇8:3-4)

神様は東の間の存在である私たちに大きな関心を寄せ、私たちが永遠の神と共にある人生を生きることができるようにと「神のことば」を語って下さったのです。

「私たちは本当のところ『何』に期待しているのか、「私たちが『誰』をよりどころに歩んでいくのか」と、自ら問い直したいのです。

北アイルランドの牧師であり詩人であったフレデリック(1849-1923)は言います。

「二人の男が同じ格子から外を見る。一人はぬかるみを見、一人は星を見る」

たとえ同じ獄屋の中にいたとしても、何に心を向けるかによって世界の見え方、そしてその日の生き方が変わるといことなのでしょうか。

【勧め】

東の間の栄光ではなく、永遠に変わることのない「神のことば」に信頼して歩みましょう。

